

■三遊亭円朝　　噺家。幕末に創作噺で地位を得、維新後は近代落語を確立、多くの門下を育てて黄金時代を開いた。

さんゆうていえんちょう
蜚社の獄・・・1839＝

江戸湯島切通しで、_2代三遊亭円生門下の音曲師、橋屋円太郎こと出淵長蔵の子に生まれる。

_父と同じく円生門下となり、

阿部正弘首座1845＝ 6歳：_小円太と名のって初高座をつとめ人気者になったが、
孝明天皇・・・1846＝ 7歳：_義兄らのすすめで寄席を退き、寺子屋に通う。
・・・1847＝ 8歳：_四谷の2代三遊亭円生の家に住み込み、修行。

・・・1848＝ 9歳：

北斎没・・・1849＝10歳：_円生が湯島に移住するにあたって、自宅に帰され、芸人になることを反対する母・義兄のすすめで、
国定忠治磔・・・1850＝11歳：_紙商兼両替商の葛西屋へ奉公に出た。

尊徳報徳論・・・1851＝12歳：_病氣になって帰宅し、改めて玄治店(現在の日本橋人形町あたり)の歌川国芳のもとで画家としての修業を積んだ。これが、のちに円朝の売りものになった芝居噺の道具を作る際に大いに役立つことになるが、
_ここでも病を得て帰宅し、母親も義兄も落語家以外には向かぬものとあきらめ、芸界に復帰できた。

万次郎帰国・・・1852＝13歳：

ペリー来航・・・1853＝14歳：

開国開港・・・1854＝15歳：_兄にすすめられて座禪の修行にはげむ。

安政大地震・・・1855＝16歳：_衰微する三遊派の再興を期して芸名を円朝に改め、場末ながら真打となった。

蕃書調所・・・1857＝18歳：

五ヶ国条約・・・1858＝19歳：

安政の大獄・・・1859＝20歳：

_鳴物噺を始める。

*「累ヶ淵後日怪談(真景累ヶ淵)」の自作自演を手始めに、多くの創作噺で人気を得る。天保の改革以後、芝居が江戸の中心から離れた浅草観音裏の猿若三座に限られ、一般大衆が手軽に見物に行けなくなったこともあって、派手な衣装や道具を使用して歌舞伎の雰囲気を持ちこんだ芝居噺は、いっそう人気を集め、
_そのため師の円生と不和になるが、師の病気を聞き、援助。

桜田門外変・・・1860＝21歳：

遣欧使節・・・1861＝22歳：

生麦事件・・・1862＝23歳：

8月18日政変 1863＝24歳：

「牡丹灯籠」を創作。

師円生が死去。

文久年間から*山々亭有人、2世河竹新七(河竹黙阿弥)などの狂言作者をはじめとする文人たちが“粋狂連”というグループをつくって三題噺を自作自演して流行させていたが、この年これに参加して落語の題材や演出法など多くのものを学び、落語界に新風を起こし、その地位を確立していく。

禁門の変・・・1864＝25歳：

薩長同盟・・・1866＝27歳：

明治維新・・・1868＝29歳：

戊辰戦争終・・・1869＝30歳：

初の日刊新聞1870＝31歳：

廃藩置県・・・1871＝32歳：

学問のすすめ1872＝33歳：

_両国の昼席で真打となった。

お里との間に朝太郎が誕生。

柳橋の芸妓お幸を妻に迎える。

円遊が入門。

皿山奇談」を出版。父が死去。

_新時勢にかんがみ、道具入り噺の道具を弟子円楽にゆずって3代三遊亭円生を襲名させ、みずからは扇子一本の素噺に転じた。実録物全盛となった当時の講談会の動向を見て円朝自身も新聞種を口演し、
_さらに実録人情噺の分野開拓をめざして実地調査を試み、「榛名の梅吉」の創作にとりかかり、

明治6年政変 1873＝34歳：

初の民間工場1875＝36歳：

三つの反乱・・・1876＝37歳：

西南戦争・・・1877＝38歳：

「安中草三郎」として発表、

「塩原多助一代記」を自作自演。

*山岡鉄舟を知り、以降は鉄舟のもとで禪に傾倒し、その話芸は迫真軽妙の極に達して朝野の名士に愛され、落語家の社会的地位を向上させる。

琉球処分・・・1879＝40歳：

・・・1880＝41歳：

明治14年政変1881＝42歳：

母が死去。_「業平文辞松達撰」初演(円朝の人情噺劇化の最初)。

三遊派困窮の者を支援。朝太郎の非行が新聞ダネとなり、寺に預ける。「雪月花三遊新話」刊。

このころ寄席の不況が続くとともに、寄席への統制が厳しくなった。

秩父事件・・・1884＝45歳：

内閣発足・・・1885＝46歳：

帝国大学始・・・1886＝47歳：

初の対等条約1888＝49歳：

帝国憲法発布1889＝50歳：

帝国議会始・・・1890＝51歳：

足尾鉾毒始・・・1891＝52歳：

大本教・・・1892＝53歳：

郡司千島探検1893＝54歳：

日清戦争始・・・1894＝55歳：

日清戦争終・・・1895＝56歳：

「怪談牡丹燈籠」(速記本)刊。これより、円朝らの人情噺・講談の速記本刊行さかんとする。

「円朝叢談塩原多助一代記」「業平文治漂流奇談」刊。

「松の操美人の生理」の速記が創刊された{やまと新聞}に連載、好評を得る(新聞連載講談の初め)。

朝太郎が結婚。山岡鉄舟が死去。

向島木母寺に“三遊塚”を建立。

朝太郎が離婚するなど、一生手を焼かされる。

_井上馨邸で「塩原多助」を御前実演。寄席出演を隠退。サルドーの「トスカ」を翻案した「錦の舞衣」や、

*「塩原多助」が修身教科書に掲載。人力車から落ちて負傷したのを契機に温泉に遊ぶことが多くなる。

モーパッサンの「親殺し」を翻案した人情噺「名人長二」なども手がけた。

朝太郎を勘当。

八幡製鉄始・・・1897＝58歳：

子規句歌革新1898＝59歳：

Bushidou・・・1899＝60歳：

ピアノ国産化・・・1900＝61歳：

_弟子のスケとして寄席出演を再開するが、

「累ヶ淵後日の怪談」〔真景累ヶ淵〕初演。

_進行性脳髄炎を発病。木原店で演じた「牡丹燈籠」が最後の高座となって、

没した。

門下には名手がそろい、明治の落語黄金時代を現出。円朝の噺はおりから盛んになった速記術によって全国に普及し(速記本)、文学にも影響を与えたといわれる。円朝が落し噺、人情噺、芝居噺、怪談噺などの江戸落語の各分野を集大成したことで、近代落語隆盛への道が開かれた。